

〈知的生産の技術〉といわゆる〈アカデミック・スキルズ〉と〈司書資格科目〉と—その交差と乖離について（その一）： パーソナル・ドキュメンテーションの視点から

水谷長志

1. はじめに—このトライアングルにある「乖離」または「すれ違い」の 関係について

2020年は、1969年から増刷を重ねて100刷145万部を凌いだ岩波新書『知的生産の技術』（以下、〈知的生産〉と略記）の著者、梅棹忠夫（1920-2010）の生誕100年を祝う年であった（図1）*1。

- * 1. 国立民族学博物館は2020年、梅棹忠夫生誕100年記念企画展「知的フロンティア」を開催。同館は2011年にも梅棹忠夫—知的先覚者の軌跡展を開催し、同名の図録（144p.）を刊行した。



図1：

左は100刷を重ねた岩波新書『知的生産の技術』（2020）

https://twitter.com/Twanami_Shinsho/status/1271040380490809344/photo/1

右は3章に記述の新潮ポケットライ・ブラリの藤川正信著『第二の知識の本 人類の持っている全知識からあなたの必要な知識を引き出す本』（1963）

本書については書名の由来にフォーカスして本誌17号に拙論を掲載。

〈知的生産の技術〉といわれる〈アカデミック・スキルズ〉と〈司書資格科目〉と
—その交差と乖離について（その一）：パーソナル・ドキュメンテーションの視点から

また、副書名に「大学生のための知的技法入門」を持つ『アカデミック・スキルズ』（以下、〈アカスキ〉と略記）の初版が、2006年に慶應義塾大学出版会から出版され、2020年はその第3版を重ねた年でもあった。

〈アカスキ〉の初版以後、後続して、近似の書名を持つ多くの類書が刊行されている*2。

* 2. 「アカデミック・スキルズ」は2013年以降、叢書名ともなり、下記を刊行している。

- ・プレゼンテーション入門：学生のためのプレゼン上達術（2020）
- ・クリティカル・リーディング入門：人文系のための読書レッスン（2015）
- ・実地調査入門：社会調査の第一歩（2015）
- ・学生による学生のための ダメレポート脱出法（2014）
- ・資料検索入門：レポート・論文を書くために（2014）
- ・データ収集・分析入門：社会を効果的に読み解く技法（2013）
- ・グループ学習入門：学びあう場づくりの技法（2013）

本学図書館を管見する限りにおいても下記の類書が確認される。

2002/ くろしお出版 知へのステップ：大学生からのスタディスキルズ 第4版
※学習技術研究会の編者による

2008/ 有斐閣 スタディ・スキル入門—大学でしっかりと学ぶために ※兵庫県立
大学教員による

2009/ 専修大学出版局 知のツールボックス：新入生援助集 改訂版 ※専修大学
出版企画委員会の編による

2011/ 実教出版 スタディスキルズ・トレーニング 改訂版

2016/ 有斐閣 アカデミック・スキル入門：大学での学びをアクティブにする ※
鹿児島大学教員による

2018/ 専修大学出版局 新・知のツールボックス：新入生のための学び方サポート
ブック ※専修大学出版企画委員会の編による

（行頭の数字は初版刊行年を記した）

論集として下記の高崎経済大学特別研究報告書2点がある。

2007/ 高崎経済大学 大学全人化時代におけるスタディ・スキルズ教育に関する基
礎的研究

2008/ 高崎経済大学 初年次教育としてのアカデミック・リテラシー教育に関する
基礎的研究

最近年の関連図書として耳目を集めたものとしては下記が挙げられる。

2018/ ちくま新書 情報の生産者になる 上野千鶴子 ※初出、『ちくま』2017.1-
2018.3

現在、図書館司書資格のための科目（以下、〈司書科目〉と略記）は、本学の開講においては、表1の通りである。「技術」の2文字を冠するのは「図書館情報技術論」においてであるが、それは〈知的生産〉と〈アカスキ〉の書名に見られる「技術」または「スキル」の含有するものとは、趣きを異にしている。どちらかと言えば、〈司書科目〉の必修科目の一つであり、〔レファレンスサービス〕や〔情報リテ

ラーシー教育]の項目を科目内容に持つ「情報サービス論」が、〈知的生産〉および〈アカスキ〉に近い内容を学習課題に掲げている。

表 1：本学における司書資格科目一覧（2020 年度）

必修／選択	科目名	単位数	開講キャンパス
必修 22 単位	生涯学習概論	2	新座
	図書館概論	2	新座
	図書館情報技術論	2	新座
	図書館制度・経営論	2	文京
	児童サービス論	2	文京
	図書館サービス概論	2	新座
	情報サービス論	2	新座
	情報サービス演習 A	1	文京
	情報サービス演習 B	1	文京
	図書館情報資源概論	2	新座
	情報資源組織論	2	新座
	情報資源組織演習 A	1	文京
	情報資源組織演習 B	1	文京
選択* 2 単位	図書・図書館史	2	文京
	図書館基礎特論	1	文京
	図書館サービス特論	1	文京
	図書館情報資源特論	1	文京
	図書館施設論	1	文京

* 選択は 2 科目 2 単位以上

筆者は、〈知的生産〉、〈アカスキ〉と〈司書科目〉のトライアングルにあって、^{skills}技術をめぐって、その射程と目指すところにある「交差と乖離」の一端を検証することによって、〈司書科目〉に〈知的生産〉〈アカスキ〉の展開を流入させるとともに、〈司書科目〉の再定義を促し、また、〈司書科目〉から〈知的生産〉〈アカスキ〉への還流の可能性を試みたいと願っている*³。本稿は、その試みの第一稿となることを企図している。

* 3. もとよりこのトライアングルを成す三者の直接の受け手、その成り立ちや狙いには差異がある。

特に〈知的生産〉においては、梅棹は「学校では（中略）知識はおしえるけれど、知識の獲得のしかたは、あまりおしえてくれないのである。そのことは、中学・高校ばかりか、ざんねんながら学問の府であるところの大学においても、おなじであ

る」と「はじめに」において記している（p.2-3）。

梅棹が〈知的生産〉をめぐって展開した「知識」そのものとその「獲得のしかた」^{s k i l l s}とが、学校教育においては「乖離」している状況にあらためて着目して論考を重ねた藤本ますみには、下記の2論文がある。

藤本ますみ（聖泉短期大学商経科、当時）「学校教育における「知的生産の技術」について（その1）」；「学校教育における「知的生産の技術」について（その2）—学生参加型の授業と知的生産の技術」、ともに『聖泉論叢』7号，p.69-107，1999；8号，p.73-99，2000所収

藤本は梅棹のもっとも身近にいて、〈知的生産〉の執筆時にあっては、秘書役を勤め、『知的生産者たちの現場』（現、講談社文庫）を1984年に著している、という自身の体験を持っていた。

筆者が上述の企図を想起した切っ掛けの一つは、2020年の9月に刊行され、一部識者においては注目を得ている、読書猿による『独学大全』の以下の記述に拠っている。いささか長くなるが引用すると*4：

事典や教科書の「存在を知らない人」は少ないだろうが、「独学における意義」は必ずしも知られていない。書誌については書誌学や図書館学で取り上げられるが、ほとんどの読書術や知的生産術で取り上げられない。これらは我々の想像を超えて多数多様な書物や知識がこの世に存在することを、そして近づくための道筋もまた既にあることを我々に教え、独学者に自分自身の知的地図を描くことを促す。

* 4. 『独学大全 絶対に「学ぶこと」をあきらめたくない人のための55の技法』ダイヤモンド社，2020.9，p.286.

本書の書評（『図書館界』nos.416，2021.1，p.230-231）において、評者の小林昌樹は「図書館情報学（以下、斯学）的には、藤川正信『第二の知識の本』（新潮社，1963）に始まる斯学知見の普及本に連なるものに見える」と述べていることは、示唆的である。

（傍点、下線部は筆者による）

2020年に至るまで、〈知的生産〉、〈アカスキ〉が刷りと版を重ね、また独学に特化した800頁におよぶこの大冊が刊行されていても、〈司書科目〉を含む図書館学の一つメタファーでもある「書誌」との間にあっては、懸隔のあることが指摘されているということである（たとえ評者の小林が、「斯学知見の普及本」と『独学大全』を捉えていても）。

本稿が指摘する「トライアングルにある「乖離」」が、依然変わらずに、あらためて痛感されるのである。

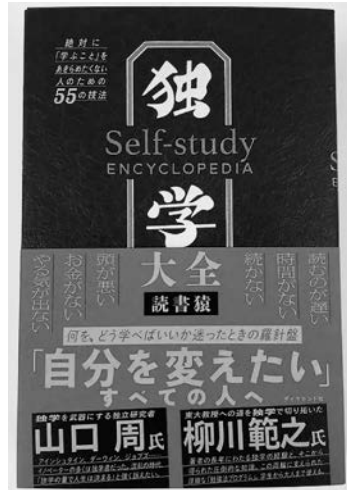
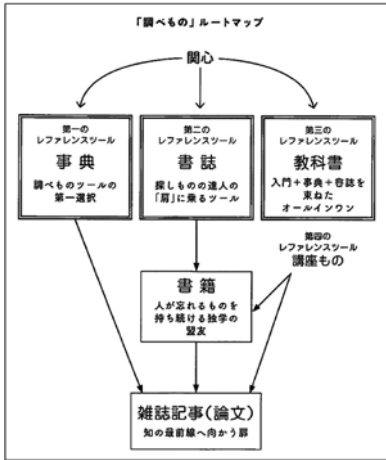


図 2 :

右図「独学大全 絶対に「学ぶこと」をききかたない人のための55の技法」

左図「「調べもの」ルートマップ」(『独学大全』, p.287 掲載)の中央の「第二のレファレンスツール 書誌」に付された「探しものの達人の「肩」に乗るツール」とは、「科学者アイザック・ニュートンが1676年にロバート・フックに宛てた書簡で用いた、「私がかなたを見渡せたのだとしたら、それは巨人の肩の上に乗っていたからです(英語: If I have seen further it is by standing on y^e sholders of Giants.)という一節」*」を踏まえているだろう。

* <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B7%A8%E4%BA%BA%E3%81%AE%E8%82%A9%E3%81%AE%E4%B8%8A>

なお、上記のWikipediaにおいては、出典についてさらに注釈が続く:「このニュートンの手紙が原典だと信じられていることも多いが、最初に用いたのは12世紀のフランスの哲学者、シャルトルのベルナルとされる。」(以上、参照は2021-1-5)

2. 〈知的生産〉に連なる1960年代のいくつかの著作について

筆者が初めて梅棹忠夫の名を知ったのは、おそらく梅棹の最初の単著であり、〈知的生産〉と同じ岩波新書の青版で出た『モゴール族探検記』(1956)を読んだ時だったろう。さらに『文明の生態史観』(中公叢書、1967)があって、次に〈知的生産〉が来た。特に冒頭第一章「発見の手帳」の印象は殊のほか強くあり、学びの「技」化を強く意識し始めた。

梅棹の〈知的生産〉(1969)は、しばしば加藤秀俊の『整理術』(1963)、川喜田二郎の『発想法』(1967、ともに中公新書)と並んで、1970年代の社会人向けの新たな学びの書として、トリオとなって喧伝された記憶がある。トリオしんがりの〈知的生産〉の出版の翌年から始まる70年代の幕開けに大阪万博があり、その跡地において梅棹が初代館長を務める国立民族学博物館が誕生するのであった。

以後、〈知的生産〉は「知的生産の技術研究会」を生むとともに、梅棹の知の「技法」は、ミュージアムの情報管理へと侵食発展し、例えば、民博をして「博情館」

〈知的生産の技術〉といわゆる〈アカデミック・スキルズ〉と〈司書資格科目〉と
—その交差と乖離について（その一）：パーソナル・ドキュメンテーションの視点から

たらしめ、さらに組織情報管理術の書として『情報管理論』（1990）ほか多数の関連図書を生んでいった*5。

- * 5. 梅棹は中公新書において「(国立民族学博物館) 館長対談」として1978-1983年に「民博誕生」「博物館の世界」「博物館と美術館」「博物館と情報」の4書を著している。また、民博の創設以来、情報学への傾斜はいや増して、『情報の文明学』（1988）、『情報論ノート—編集・展示・デザイン』（1989）と著作を重ねている。とりわけ、『研究経営論』（1989）と『情報管理論』は、民博という公けの館、公器における〈知的生産〉のシステムの実装と理論化へと進化していったと見て取れる。

〈知的生産〉以来、社会人のための新たな学びの書を数え上げれば枚挙に暇がない。であるのに対して、高等教育における学びの技の書の普及は、やはり慶應大学出版会の〈アカスキ〉を待たねばならなかった、と言ってもよいだろう。

〈知的生産〉と〈アカスキ〉との間にある「乖離」の、その理由と背景に立ち至ることは他日に期したいが、上記の『独学大全』の引用にあるように、図書館（情報学）と読書術や知的生産術との懸隔は、例えば「書誌」をめぐる知見の持ちようにおいて顕著であったし、いまなお続いているとも言える。

そのような状況の中で図書館情報学の立場からほとんど唯一、加藤・川喜田・梅棹のトリオに先駆けて、特に梅棹の〈知的生産〉の流儀を先取りしていたのが、藤川正信の『第二の知識の本』（1963）があったことを、ここに明記しておきたい（図1・右）。

3. 1980年代に邂逅した V. Stibic の 2 書について

いまは筑波大学の情報学群に編み込まれているが、かつて国立の単科大学として図書館情報大学が筑波の地にあった*6。

- * 6. その略史は、1921：文部省図書館用務員養成所／1925：同省図書館講習所／1947：帝国図書館附属図書館用務員養成所から国立国会図書館附属図書館職員養成所と改称／1949：文部省所管、文部省図書館職員養成所／1964：図書館短期大学／1979：図書館情報大学開学／2002：国立大学統廃合の最初の事例として筑波大学に編入／2004：閉学。

『第二の知識の本』の著者である藤川は、慶應義塾大学文学部図書館・情報学科で教鞭をとったのち、紆余曲折して図書館情報大学に異動した。副学長に就かれる直前、「図書館情報学概論」の講義で、自著『第二の知識の本』を「早すぎたベストセラー」と評していた時の、いささかの残念と優越の表情が思い出される。

その概論の講義の中で紹介された（と記憶するが、別の講師の講義であったかもしれない）のが図2-3にある V. Stibic の 2 書（以下、図3：PDI1980/82 | 図4：TM1982/84 と略記）であった。

図 3-4 からは、V. Stibic、または V. スティビッツとしか見えないが、V は Vladimir であり、東欧の出身と知られる。

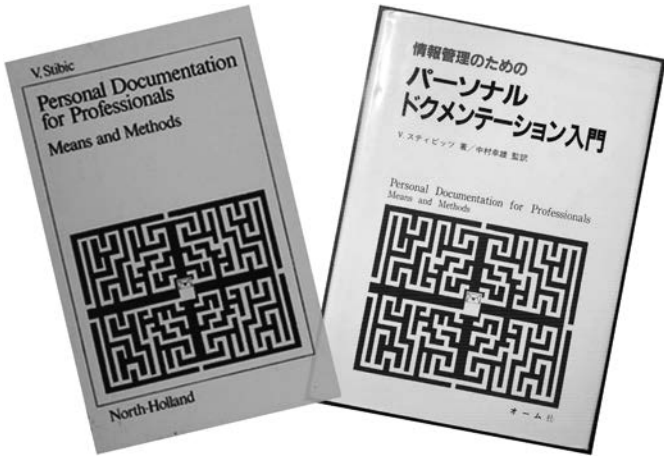


図 3 :

V. Stibic. *Personal documentation for professionals: means and methods*. North-Holland Pub. Co., sole distributors for the U.S.A. and Canada, Elsevier North-Holland Inc. 1980.

本書には後に監訳する中村による書評がある。『ドキュメンテーション研究』1981.11. p. 501-502.

V. スティビッツ著；中村幸雄監訳。情報管理のためのパーソナルドキュメンテーション入門。オーム社 1982.12.



図 4 :

V. Stibic. *Tools of the mind: techniques and methods for intellectual work*. North-Holland Pub. Co., Elsevier Science Pub. Co. [distributor] c1982.

V. スティビッツ著；中村幸雄監訳。知的生産の技術と方法：ツール・オブ・マインド。オーム社 1984.10.

本書には細野公男による書評がある。『ドキュメンテーション研究』1985.8. p. 474-475.

PD1980/82の「著者はしがき」（訳書 p. vi）から：

ヨーロッパの中心にある楽しい国（チェコスロバキア）であるが、大陸の危険な断層に面しており、過去 1000 年間のヨーロッパの政治に変動があるたびに地震を起してきたこの地を去り、わたしはオランダに家庭を持ち、Philips（〔社〕…中略…）において、面白くかつやりがいのある仕事を得た。これはまたオフラインからオンライン検索へ、手作業インデクシングから自動インデクシングへとジャンプする機会にもなり、これが 70 年代におけるわたしの仕事となった。

TM1982/84の「著者はしがき」（訳書 p.[iii]-iv）から：

知的作業の技法に関して私が初めて興味を抱いたのは、T. G. マサリクが 1898 年に著した「いかに仕事をするか」という題目の講義の抜き刷りを学生時代の初期に父の書齋で見つけたときであった。偉大な哲学者および人文主義者であり、民主チェコスロバキアの初代大統領でもあったマサリクは、大学教授としてすでに 1900 年以前に学生にいかにして学び、仕事をするかについて教えていたのであった。これは私の探求心を刺激し、私はより新しく詳しい文献を探した。

V. Stibic の経歴は、1920 年生まれであること、マサリクを偉大な人文主義者と書いているところからは、プラハの春、そしてその後の政治的反動からのオランダへの移住の背景が垣間見られるなどのほかは、未詳である。

確かに 60 年代までは、プラハの地で発行の学術図書館の著作の記録がチェコ国立図書館の OPAC から確認できるが（図 5）、1968 年を境にこの図書館の OPAC からは、その名は消えている。



図 5：

チェコ国立図書館 OPAC の検索事例の画面から

著者 = Stibic で検索すると本書がもっとも後年の出版となっている

https://aleph.nkp.cz/F/8SVFUJEUVVHA6R59UJS27MBK7RE3RL9PVG163A868JGGPHMHV-28337?func=full-set-set&set_number=003045&set_entry=000010&format=999

オランダのアムステルダムに本拠を置く多国籍企業である Philips 社でオンライン検索と自動索引の勃興期に I&D (Information and Documentation) の専門家として従事した V. Stibic は、PD1980/82 において、「パーソナル・ドキュメンテーション」を：

1. 一度入手した情報を失うことなく、
2. 利用可能な情報源の利用度を高め、
3. 知識の組織を改善し、
4. 情報の独創的利用のすばらしい機会を提供し、
5. 多くの事実や考えの結付きを容易にし、さらには
6. 予想しなかった関係、連想（組合わせ）、結論を見付け出すものである。

と定義している（以上は訳書 p.3）。

2年後の TM1982/84 においては、「15 ツールは知的活動を援助する」として：

1. ツールは時間を省く—これまでのことは今後もっと効率的に行われる／
Tools save time - old things are done more efficiently^{*7}
2. 技術的ツールは方法を改善する—新しいことが^dできるようになる／
Technical tools improve methods - new things can be done
3. 技術的手段は問題回答および意思決定を援助する／ Technical means support problem - solution and decision-making
4. 創造性および発明能力を援助する／ Support of creativity and inventiveness

と定義している（以上は訳書 p.17-18）

* 7. ここには著名な「ランガナタンの図書館学の5法則：Ranganathan's five laws of library science」における「第4法則：Save the time of the reader. —読者の時間を節約せよ」が容易に見て取れよう。

4. 〈司書科目〉の「情報サービス論」に V. Stibic の2語 「personal」と「mind」を挿入すること

すでに『独学大全』から引用もして、「図書館（情報学）と読書術や知的生産術との懸隔は、例えば「書誌」をめぐる知見の持ちようにおいて顕著である」と述べた。

その「書誌」について、もっとも多くを語るだろう科目の一つが「情報サービス論」である。

「もっとも多くを語る」というのは、筆者の科目構成の位置づけに由来するが、「書誌」自体は〈司書科目〉において、例えばパブリック・サービスにおける「情

報検索」やテクニカル・サービスにおける「目録・分類」などが登場するほとんどすべての〈司書科目〉に現れる基本のタームである。それが紙媒体からデジタル・レファレンスツールに変容したとしても、である。

「情報サービス論」の教科書として定評のある『現代図書館情報学シリーズ』の第5集（樹村房，改訂版，2019）から、「ドキュメンテーション」と「ツール」に関連する章を抜き出すならば、「7章 利用教育の現状と展望」「8章 各種情報資源の特徴と利用法」がもっとも該当する。

〈司書科目〉が図書館の司書の資格であるから、「ドキュメンテーション」も「ツール」も各講義にあっては、当然、前提としては図書館という「公器^{public}」におけるものとして、いずれの講義おいても展開される。

その上で、V. Stibic の2書における「ドキュメンテーション」と「ツール」の2語の定義を援用しつつ、かつ2書のタイトルを決定的に特徴づける「personal」と「mind」の2語の側面から再論することに意義はある、と考えている。

さらに言えば、「公器^{public}」である図書館と「私器^{private}」である私との双方において、図書館と図書館人が長く開発してきたツール、中国においては「工具書」とも言われる*8、がV. Stibic の書名にあるよう「精神のツール^{tools of mind}」として、あらためて受講の学生をして「書誌」へと向かわせることの道筋について考えている。

公器であり、知的営為の介助装置としての図書館と私におけるドキュメンテーションとを連結することは、V. Stibic が書名に込めた4語を〈司書科目〉において、とりわけ「情報サービス論」の講義の始まりと要^{かなめ}に置くことによって、その可能性が拓けるのではないかと考えており、本稿の題目に掲げたトライアングルにある「乖離」を「交差」に変容させる一助の試みを次年度以降の講義展開において、課題とする次第である。

* 8. 永田知之「工具書について 漢籍の整理」『東方學資料叢刊』18, 2009.

<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/130672/1/kogusho.pdf>

おわりに—ドキュメンテーションをめぐって：P. オトレ再考へむけて

V. Stibic のオランダでの第一作の書名として用いた documentation の語は、その濫觴を歴史に訪ねるならば、20世紀初頭の「世界書誌」を夢見た P. オトレ（Paul Otlet, 1868-1944, 図6）に行き着く。

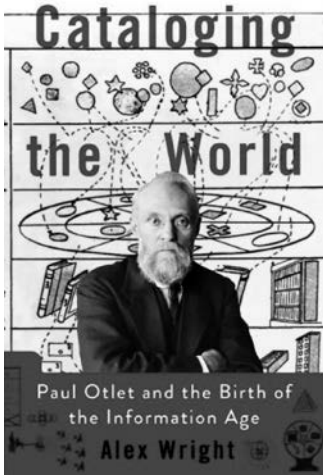


図 6 :

Alex Wright, *Cataloging the world: Paul Otlet and the birth of the information age*. Oxford University Press, c2014.

右は挿図から：P. オトレが「世界書誌 (RBU : *Répertoire Bibliographique Universel*)」として構想し、実装したカードシステムの模様。

オトレの documentation 活動にかかわって、半世紀近くも前に次の言説が根本彰によって指摘されていた*9：

書誌は知識のひとつの表現形態である。1 点のカードが 1 単位の知識の存在を示し、それらを包括的に集め、主題によって排列することにより、人類のもつ知識のカタログが作りだされるという発想は、この世紀の一般的雰囲気を反映していたのではないかと思われるのである。世界書誌の理念が今日でも、単にプラグマティックな意味での有用性を超えて私たちにとって望ましいと考えられているとすれば、それは知識をもつことへの信頼が依然として維持されているからである。これを疑うことは図書館情報学の基盤を揺るがすことにもなりかねない (後略)

(下線部は筆者による)

* 9. 根本彰「IIB の世界書誌編さん活動：1895-1914」*Library and Information Science*. No. 19, 1981. 後日、『文献世界の構造 書誌コントロール論序説』（勁草書房, 1998）に所収, p. 141.

「1 点のカードが 1 単位の知識の存在を示し」、それが図書館の公器としての「世界書誌」の基盤となること、と同時に、梅棹や V. Stibic らの描くパーソナルな知的活動の基盤の一粒となることの確認は、〈司書科目〉のいずれにあっても重要である。

本稿の続編として本誌の次号においては、「カード」をめぐる、知的行為にお

〈知的生産の技術〉といわゆる〈アカデミック・スキルズ〉と〈司書資格科目〉と
—その交差と乖離について（その一）：パーソナル・ドキュメンテーションの視点から

ける「公器」と「私器」の「交差」について、P.オトレの「世界書誌」をも再考
しつつ、「カード考（試論）」として、本稿の続編に用意したいと考えている。